★事務所：神奈川県平塚市豊原町22-13　　TEL/FAX：0463-36-2255
★例　会：第1・第3・第5　木曜日　12:30～13:30　　大磯プリンスホテル　　TEL：0463-61-1111　FAX：0463-61-6281
会 長 田中 敏治　　会長エレクト 吉川 稔　　幹 事 吉川 稔

第２６０４回　例会

令和6年9月２６日　No.7

■司会:三鈴 よしの　■点鐘：田中 敏治　■合唱：我等の生業

◇プログラム　・10月3日：フォーラム・理事会　・10月10日：休会　・10月17日：ゲストスピーカー

◇出席報告

例　会	会員数	出席数	出席率	ﾒｰｸｱｯﾌﾟ	修正出席率
２６０４回	14(11)	8	83.33%	－	－
２５０２回	15(12)	9	75.00%	－	－

◇欠席者（3名）
原、布川、岡会員

◇ﾒｰｸｱｯﾌﾟ（0名）

◇ゲスト：杉崎郁夫様（平塚ろう学校校長）

◇ビジター：小林誠様・三富正規ＡＧ
品田雄一様・キム・ユギョン様

◇幹事報告
吉川稔幹事

◇会長報告
田中敏治会長

◇委員会報告：
☆出席報告
藤田眞喜子委員

☆スマイルボックス　　瀬戸亨一委員

・平塚湘南ロータリークラブ：　第8G　AG　三富正規本日はIMα(咲む)ご案内と平塚ろう学校校長杉崎先生のサポートで参りました。杉崎校長先生、卓話よろしくお願いします。

・平塚湘南RC　品田雄一会員：
本日は大磯ロータリークラブの皆様よろしくお願い申し上げます。

・平塚湘南RC　キム・ユギョン会員：平塚湘南RCから来ました。宜しくお願いいたします。

・田中敏治会長：こんにちは。平塚ろう学校杉崎校長、平塚RC小林さんようこそ。卓話宜しくお願い致します。三富AG、品田AG幹事、ユギョンさんようこそ。例会を楽しんでください。

・吉川稔幹事：杉崎校長先生、卓話楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

・新宅文雄会員：1.杉崎校長先生、卓話楽しみです。よろしくお願い致します。
2.三富AG様、小林誠様、品田雄一様、キム・ユギョン様ようこそいらっしゃいました。本日は平塚ろう学校について学ばせていただきます。

・三鈴よしの会員：杉崎郁夫様、本日はお話を楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。三富AG、小林様、品田様、キムユギョン様ようこそおいで下さいました。よろしくお願いいたします。

・藤田眞喜子会員：去る5月30日ゲスト卓話者として当クラブにおいで下さいました長野県佐久市の坂川卓志様が紺綬褒章を授かったとの事です。8月29日の事でした。

・越地貞裕会員：杉崎郁夫様ようこそいらっしゃいました。よろしくお願いします。三富正規AG、小林誠様、品田雄一様、キム・ユギョン様ようこそお越し下さいました。

・瀬戸亨一会員：杉崎郁夫様ようこそいらっしゃいました。卓話よろしくお願いします。三富正規AG様、小林誠様、品田雄一様、キム・ユギョン様ようこそ！今日は沢山のお客様が来られてうれしいです。楽しみましょう！

◇卓話

◆◇◆　「積小為大」の精神で◆◇◆

神奈川県立平塚ろう学校
校長　杉崎郁夫様

皆さん初めまして。平塚ろう学校校長の杉崎郁夫と申します。本日はこのような場でお話する機会をいただきありがとうございます。簡単に自己紹介をさせていただきます。自己紹介の文書をご覧ください。

大学卒業後、高等学校の国語教員として教職をスタートし、初めて特別支援教育に携わったのが現勤務校「平塚ろう学校」です。はじめは手話も指文字も全く分からずに「どうすれば良いのか・・・」と悩み多き毎日だったことを思い出します。その後、少しずつですが手話が分かり始めると日頃何気なく使っている言葉というものがどれほど大切なのか、その習得に向けて何をしていくべきなのか、コミュニケーションの基本は何か、など考えることができるようになってきました。そのあたりのことも含め、皆様にお伝えできればと思っています。

それでは説明に移らせていただきます。こちらの写真ですが本校を盲学校側から移したもので、塔のように見えているのが幼稚部の建物となります。左端のかまぼこ型の屋根は体育館です。内部も木材がふんだんに使われており、暖かな雰囲気の校舎となっています。

県内の特別支援学校の状況となります。県立：本校29校、分教室22教室の規模ですが、現状では教室不足が深刻化している状況もあります。今後も特別支援学校の整備は進められる予定となっています。聴覚障害部門のある県立特別支援学校は本校と相模原中央支援学校の2校です。相模原中央支援学校は病弱部門以外の4部門が設定されている学校です。

県立以外のろう学校は　横浜　川崎　横須賀　の3校です。　国立の特別支援学校は２校あり、筑波大学附属久里浜特別支援学校と横国大教育学部附属特別支援学校となります。

こちらが平塚ろう学校の校章です。Hは平塚、Dはろう（Deaf）から取っています。神奈川県立の特別支援学校は養護学校の名称から支援学校に代わりましたが「ろう学校」「盲学校」は以前から同じ名称が継続されています。ご存じの方も多いかと思いますが私立中郡盲人学校内に中郡ろう話学校が設立され他ところから歴史が始まります。まもなく100周年を迎えることになります。なお、100周年に関する行事は令和8年度に実施の予定です。設置学部は記載のとおりで、幼稚部から高等部まで在籍してる生徒もいます。また、乳幼児相談、通級指導も行っています。

本校のミッションは「共生社会の実現に向け、児童・生徒の自立と社会参加に向けて一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育」の実現となります。神奈川県教育委員会は「すべての子どもたち一人ひとりが持つ自らの力では解決できないそれぞれの課題を「教育的ニーズ」としてとらえ、その教育的ニーズに適切に対応していく「支援教育」を推進してきました。さらに、この理念を踏まえ、共生社会の実現に向け、すべての子どもができるだけ同じ場で共に学び共に育つことをめざす、という基本的な考え方のもとで、インクルーシブ教育を推進しています。

本校のミッションはご覧のとおりとなります。上段は主に本校内での取り組むべき内容、下段は外部組織との連携が柱となる取り組み内容となります。手話の普及に関してですが、平成27年4月に神奈川県手話言語条例が施行されました。神奈川県手話推進計画には3つの方向性が示されており、①手話の普及、②手話に関する教育及び学習の振興、③手話を使用しやすい環境の整備、となっています。

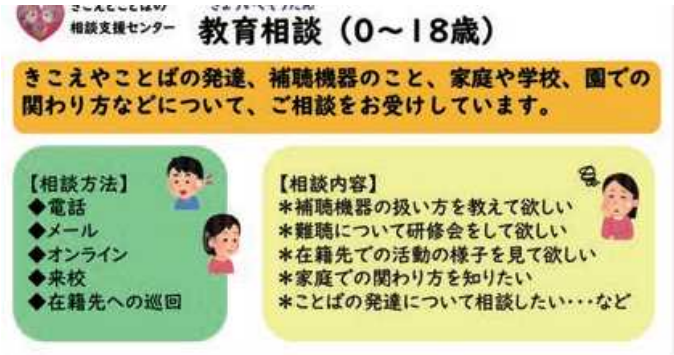
平塚ろう学校の幼児・児童・生徒の在籍状況です。県内各地区から通学しています。遠方の場合、寄宿舎を利用している生徒もいます。

聴覚障害といっても聞こえの状況は様々です。それぞれのお子さんの実態に合わせて最適な教育環境の選択が実現できるよう、様々な機関との連携を実施しています。

先ほど聞こえの状況は様々、とお話ししましたが、例えばここにあるような実態を把握し、正確にアセスメントすることが求められます。

補聴器にも様々な種類があります。人工内耳装着の幼児・児童・生徒の数は増えてきている傾向にあります。

聴覚障害に関しての理解を深めていただく機会として今日のこの時間をいただいていますが、このようにお考えの方もいらっしゃるのではないでしょうか？私もはじめは同じような考えを持っていました。



補聴器に関しては画面のようなことを基本として押さえていただきたいと思います。補聴器がもっとも効果的に使える状況は静かな場所での１対１の会話です。しかし日常生活の中ではそのような場面設定をすることが難しいことのほうが多く、補聴器をしていても次のようなことがあります。遠くから話されたり、後ろから話しかけられたりすると気づかないことが多いです。

また反響や騒音のあるところでは、補聴器気が反響音や騒音も大きくするため、話を聞き取ることが難しくなります。

（実際に風の音がうるさくて友達の声がきこえにくかったと言っていた例もあります。）また精密機械なので、水や湿気、衝撃に弱いので取り扱いには注意が必要です。電池や充電で動きます。補聴器があれば聞こえに関する課題がすべて解決するということではない、ということです。

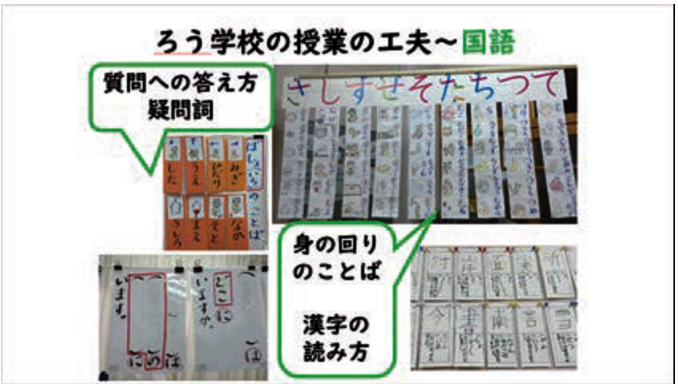
聞こえの実態が様々であることはお伝えした通りであり、コミュニケーションの際にも様々な情報を総合的に用いていますが、環境の影響を受けやすいということがあります。視覚障害を併せ持つ、盲ろうの方はさらに厳しい状況であると想像できます。

よく聞く音の大きさを示すデシベルという言葉がありますが、日常生活における場面を図に示したもの

です。
聴覚障害のあるお子さんの実態とその実態に対応する方法としてどんなことが考えられるか、ということを示しています。
ろう学校ではこのようなコミュニケーションが日常的に心がけられている、ということになります。視覚的な情報が非常に重要であるということになります。
コミュニケーションの際に心が得ていただきたいこ

と、それはどうすればより良くお互いが伝えられるのか、受け止められるのか、ということを相手の立場に立って考えていただく、ということになります。
要するにコミュニケーションの原点に立つ、ということにつながると私は考えています。
ここからは各学部の紹介となります。幼稚部の目標となります。
日課表です。
小学部の教室の様子です。視覚情報が多く掲示されている様子がお分かりかと思います。
小学部の目標、日課表です。
中学部です。
高等部です。
寄宿舎の外観、及び内部の様子です。寄宿舎では寄宿舎指導員が毎日の生活を指導し、日常生活を通して子供たちの成長を見守っています。
部活動の状況です。全国のろう学校も生徒数は減少傾向であり、野球部やバレーボール部でも合同チームによる参加が珍しくありません。大会の運営も各聾学校が協力し合いながら対応している現状です。
進路状況です。こちらも生徒の実態が様々であることを反映したものとなっています。
通級指導教室は、地域の小・中学校に通う聴覚障害児が、きこえやコミュニケーション等について学ぶ場です。
先ほど各学部の状況を簡単にお伝えしましたがこちらに示したようなことが各聾学校においてはごく日常的に実施されていることとなります。視覚による情報提示、環境音を整える、といった工夫となります。

例えば、算数の場合授業での工夫として視覚情報の提示の仕方の例となります。
国語に関しての例です。



このように様々な工夫があるわけですが、聴覚障害についての理解を深めていただき、今後の対応に役立てていただければ幸いです。本日はどうもありがとうございました。